

平成 29 年度「おきぎんふるさと振興基金」

「伝説の争乱・与那覇原軍～宮古島の 13 世紀から 15 世紀にかけての防御的遺跡の消長に関する研究～」〔研究報告概要版〕

研究代表者：久貝弥嗣、共同研究者：本村麻里衣・久貝春陽

1. 与那覇原軍について

(1) 与那覇原軍とは

1748 年に編纂された『宮古島記事仕次』の中では、与那覇原と高腰按司、与那覇原と目黒盛による争いについて触れ、与那覇原が、老人、子どもまでもを殺戮していく凄惨な争乱の状況が記されている。この記述が、歴史史料にみる与那覇原軍の初見である。

宮古郷土史の研究者である慶世村恒任は、著書『宮古史傳』の中で、与那覇原軍によって滅ぼされた集落として、大浦多志城、大嵩城、西美野、美野、美野娥麻、川満原、浦ノ島をあげている。これは当時の伝承などをもとに慶世村が整理したものと考えられる。また、稲村賢敷は、著書『宮古島庶民史』の中で、与那覇原の本拠地が現在の盛加井の一带にあったと想定している。これらの先行研究においては、世代計算などを根拠として与那覇原軍の年代について 14 世紀の後半頃と推察されている。

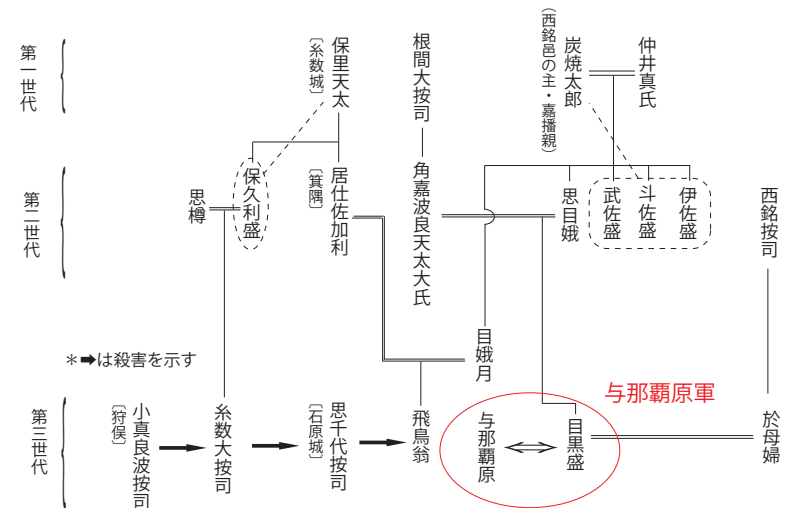
(2) 与那覇原軍の歴史的意義

凄惨な争乱のイメージの強い与那覇原軍であるが、与那覇原軍を境に宮古の歴史は大きく変化する。与那覇原軍の前においては、宮古島の各地に按司や主などと呼ばれる地域の有力者が数多くみられるが、与那覇原軍の後には、与那覇原軍の最終的な勝利者である目黒盛を島の主長とし、漲水港を眼下に見据える根間・外間の地域を中心とした中央集権社会の形成が始まり、与那覇勢頭の中山入貢により沖縄島との関係性が重要視されるようになる。

このような社会変化の一端は、宮古島の 13 世紀から 15 世紀の遺跡の変化からもみてとれる。13 世紀後半以降、宮古島の遺跡数は急増し、北海岸には丘陵の頂上部に石積を有する遺跡が数多く形成される。しかし、これらの石積を有する遺跡は、15 世紀の前半に突如として遺跡の活動に終止符がうたれる。このような遺跡には与那覇原軍に関連する伝承がのこされていることから、争乱に象徴されるような歴史的な画期が与那覇原軍にあったと考えられる。

(3) 研究方法

本研究では、前述した 13 世紀後半から 15 世紀前半の遺跡の文化要素を考える上で、「石積遺構」、「中国産陶磁器」、「宋銭」という 3 つの視点からアプローチを行った。また、宮古島市教育委員会に収蔵されている下地和宏氏採集資料は、発掘調査件数の少ない当該期の遺跡の様相を考える上で重要な資料であることから、これらの資料の図化、集計作業なども行った。



与那覇原軍関連人物相関図



与那覇原軍関連位置図

2. 活動経過

【平成 29 年】

- 7月10日(月) おきぎんふるさと振興基金交付式〔場所：沖縄銀行本店〕
- 7月30日(日) 第1回研究活動会議
- 7月31日(月)～8月10日 現地調査〔箕島(ムイズマ)遺跡、オイオキバル遺跡〕
- 8月28日(月)～29日(火) 石垣島資料調査(久貝弥嗣)
*嘉良嶽東貝塚、舟蔵第2貝塚、ピロースク遺跡、(桃里恩田、山原貝塚)
- 9月2日(土) ムイズマ遺跡石積遺構調査。西銘城跡石積遺構調査
第2回研究活動会議〔場所；文化財資料室〕
- 9月19日(火) 高腰城跡出土銭貨借用(久貝弥嗣)
- 9月20日(水) 高腰城跡出土銭貨エックス線透過撮影作業(株式会社文化財サービス)。
- 10月15日(日) 第1回研究会
場所：働く女性の家ゆいみあ1階会議室 時間：10:00～12:00
報告者：久貝弥嗣「伝説の争乱・与那覇原軍について考える－先行研究と新たな研究への取り組み－」
- 10月21日(土) 宮古郷土史研究会10月定例会にて久貝弥嗣が研究報告
「伝説の争乱・与那覇原軍について」
- 12月21日(水) 高腰城跡踏査及び聞き取り調査

【平成 30 年】

- 1月13日(土) 第3回研究活動会議〔場所；文化財資料室〕
第2回研究会〔場所：働く女性の家ゆいみあ1階会議室/時間：14:00～16:30〕
報告者：久貝弥嗣「宮古島市内グスク時代遺跡の出土銭貨について」
- 1月14日(日) 川満地域の遺跡踏査(川満原・浦ノ島を考える)
- 1月15日(月)～31日(金) 下地和宏氏採集資料整理作業
- 1月17日(水) 今帰仁城跡出土白磁資料の調査〔場所：今帰仁村教育委員会〕
- 1月18日(木) 高腰城跡出土中国産陶磁器調査〔場所：沖縄県立埋蔵文化財センター〕
- 3月10日(土) 第3回研究会〔場所：働く女性の家ゆいみあ1階会議室〕
報告：本村麻里衣「宮古島におけるグスク時代の石積で囲まれた遺跡を考える～箕島遺跡現地調査報告と課題～」
久貝春陽「川満地域の遺跡の概要と与那覇原軍の伝承にみる「川満原」「浦島」への検討」

- 3月 研究論文「宮古島市内の出土銭貨」を『宮古島市総合博物館紀要第22号』に投稿
- 4月28日(土) オイオキバル遺跡調査(調査者：本村麻里衣・久貝弥嗣)
- 5月2日(水) オイオキバル遺跡調査
調査者：本村麻里衣・久貝弥嗣 / 参加者：山本正昭、石井龍太 /
協力者：立津義康、又吉恭則、下地浩光
- 5月12日(土) シンポジウム「伝説の争乱・与那覇原軍」
会 場：働く女性の家ゆいみあ運動室 / 参加者：52名
報告者：本村麻里衣「宮古島におけるグスク時代の石積で囲まれた遺跡を考える」
久貝弥嗣「宮古島市内グスク時代の中国産陶磁器」
久貝春陽「川満地域の遺跡にみる与那覇原軍」

調査指導・協力者(協力機関)

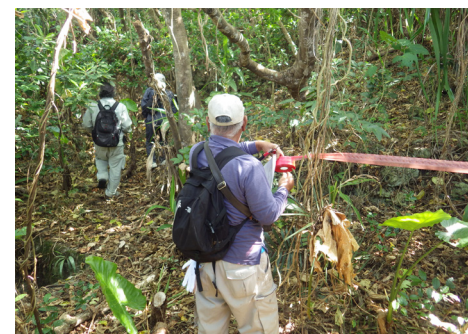
下地和宏(宮古郷土史研究会会長)、
山本正昭(沖縄県立博物館・美術館)
大浜永寛、島袋綾野(石垣市教育委員会)
砂辺和正(宮古島市教育委員会)
宮古島市教育委員会、石垣市教育委員会、
沖縄県立埋蔵文化財センター

調査補助・資料整理作業員

立津義康・又吉恭則・下地浩光
高橋美智代・山里智子・草浦昌子



川満での遺跡踏査風景



ムイズマ遺跡での石積遺構調査風景



遺物実測作業風景(下地和宏氏採取資料)

3. 石積遺構に関する調査

1727年に編纂された『雍正旧記』の中では、伊佐良城、浦島大立城、久場川城、金志川城、高腰城、大嶽城、西銘飛鳥城、大浦多志城という8つの城について、その規模や門の方向、城の主などが記されている。

このような石積を有した遺跡については、沖縄県教育委員会によるグスク分布調査が実施され、石積の測量調査などが実施されている。この中で、複数の郭で構成される大規模な石積を有する遺跡としてムイズマ遺跡、オイオキバル遺跡が報告されている。この2つの遺跡については、その後詳細な調査が行われることが少なく、その石積の性格については不明確な要素が強かった。

本研究当初の段階において、このような石積遺構については従来指摘されているように防御的な機能が想定された。今回、現地調査を行う中で、これらの石積について、大きく2つのタイプに分類を行った。石積Aは、約40～80cm大の石を使用し、1～3段程度に粗く積むタイプ。石積Bは、約30～40cm大の石を使用し、視覚的に高く積むタイプである。この2つの石積の範囲を図化すると、石積Bは、丘陵の頂上部を意識的に囲う意識が見て取れる。また、石積Bのもう一つの特徴としては、石積の内部の高さ約50～80cmと非常に低い。このことから、このような石積を有する遺跡については、従来の複郭的に石積で囲う防御的な機能は低いと考えられる。むしろ、石積で囲われた範囲は、丘陵の最高標高地点であり、海域への見通しを意識した立地であるといえる。これらの要素は、高腰城跡、西銘城跡、大浦多志城跡などの他の石積を有する遺跡にも共通しており、石積は防御的な機能より、海域の遠見としての機能性の方が高いと考えた。

石積を有する遺跡は宮古島の北海岸に集中している。北海岸においては、与那覇勢頭が沖縄島へ出帆した白川浜が位置しており、これらの港との関係性とも密接な関係性を有していたことが推察される。

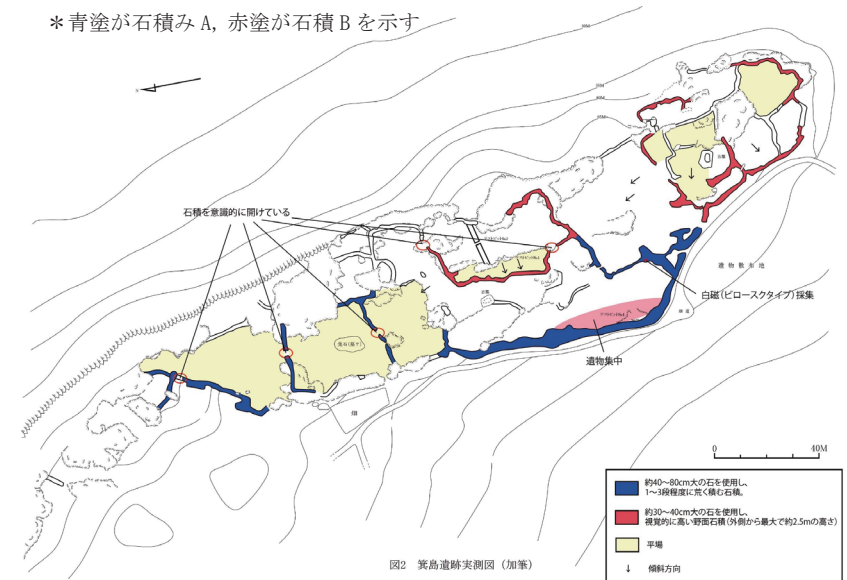


ムイズマ遺跡の石積 * 石積分類A

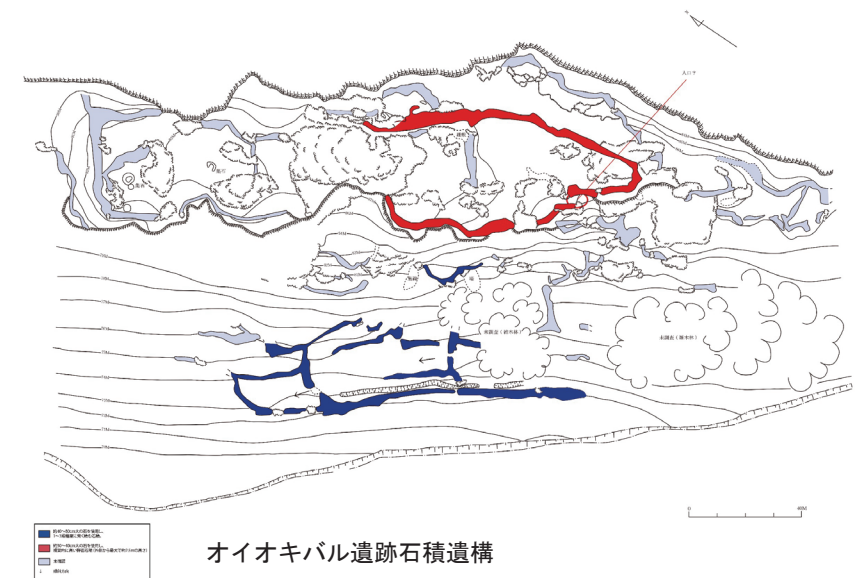


オイオキバル遺跡の石積 * 石積分類B

* 青塗が石積みA、赤塗が石積Bを示す



ムイズマ遺跡石積遺構



4. 中国産陶磁器

14世紀代の中国産陶磁器の中でも白磁については、木下尚子氏らによって詳細な生産地の調査、消費地における出土状況などの研究が報告されている。この中では、白磁の今帰仁タイプが宮古・八重山諸島に多く出土する傾向が示され、中国南部から台湾北部、八重山諸島、宮古諸島、沖縄諸島へといたる交易経路が示された。今回の研究でも、木下氏らの研究報告を基礎とし、宮古諸島における白磁の出土状況について整理を行った。

14世紀代の白磁の調査を行う上で、今帰仁城跡出土の白磁と高腰城跡出土の白磁を主体的に分析した。白磁今帰仁タイプは、金武正紀氏によって設定され、口縁部や底部の形態などから3つに細分を行っている。この金武氏の分類概念に基づいて宮古島市内の今帰仁タイプをみた場合、今帰仁タイプの最も特徴的な底部の形態は共通するものの、内底の円形の削りこみ（写真1）や、口縁部の肥厚状態には差異がみられた。このような違いについて、田中克子氏より今帰仁タイプの生産地である浦口窯産の一群であることとご教示を受け、浦口窯産の製品としてまとめることとした。

高腰城跡出土の白磁について、底部と口縁部の部位ごとに各分類の集計を行った（図1）。各分類の出土状況を見ると、玉縁口縁、端反、口禿の13世紀中頃までに段階では出土量が非常に少ないのに対し、今帰仁タイプの浦口窯とピロースクⅡ類の閩清窯において出土量が急増する。この2種に関しては、13世紀後半から14世紀中頃に位置づけられることから、ほぼ同時期に宮古島に搬入された陶磁器群であると考えられる。しかし、14世紀後半のピロースクⅢ類の段階になると、再度その出土量は減少している。今帰仁タイプの出土が宮古・八重山諸島に多く見られる現象がすでに宮城弘樹・新里亮人両氏の指摘する所であるが、今回の分析によって、その出土量が沖縄諸島の出土量に比べ圧倒的に多く、年代的な出土変化を見てとることができた。このような出土状況は、今回資料整理を行った下地和宏氏採集資料の分類、集計の状況からも明らかであることが示された。

これまでに、久貝は、13世紀後半から15世紀前半の宮古諸島の中国産陶磁器の組成の特徴として、今回分析を行った浦口窯白磁の出土量が多いのに対し、今帰仁城跡では浦口窯白磁と共伴関係にある青磁鎚蓮弁文碗が極僅かであること、中国産褐釉陶器の出土量が多いこととした。今回の分析を行った高腰城跡の青磁についても、鎚蓮弁文の出土点数は非常に限られていた。また、中国産褐釉陶器の生産地については、田中克子氏にミヌズマ遺跡出土の資料を見ていただいた際に、ほぼその全てが磁灶窯であることとご教示うけた。中国産褐釉陶器の生産地を明確にできたことは、宮古・八重山諸島の中国産陶磁器の交易形態を考える上で非常に重要な点である。



写真1 高腰城跡出土の今帰仁タイプ白磁碗（第21図1）



写真2 高腰城跡出土の今帰仁タイプ白磁碗と庄辺窯系白磁（左第23図2、右第23図3）



写真3 今帰仁城跡（主郭）出土の今帰仁タイプ白磁碗（第27図3）

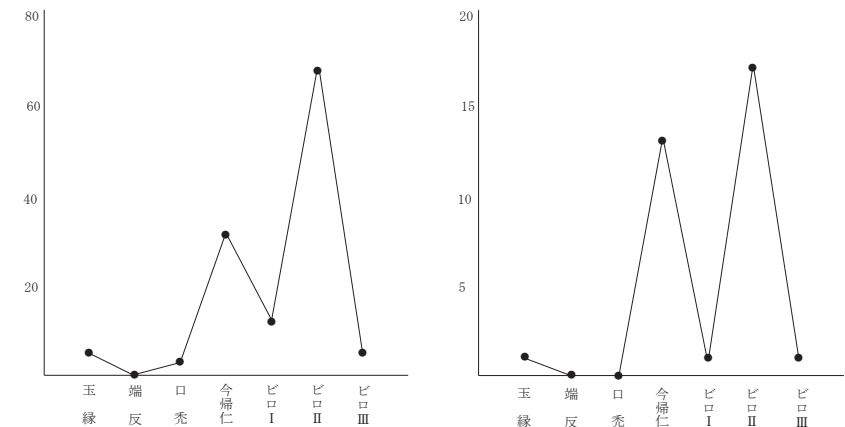


図1 高腰城跡の白磁出土点数（左は口縁部の集計、右は底部の集計）

5. 出土銭貨

本研究において、出土銭貨を研究テーマとして設けた目的として、宮古・八重山諸島と沖縄諸島の13世紀後半から15世紀前半の中国産陶磁器の組成に違いがみられるように、銭貨の出土傾向に違いがあることが想定されたためである。

沖縄県内の出土銭貨の研究については、宮城弘樹氏によって集成が行われ、時代ごとの地域的な出土傾向等について考察が行われている。本研究では、宮城氏の研究成果をふまえ、宮古・八重山諸島の出土銭貨について再度集成作業を行い、宮古諸島で15遺跡52点、八重山諸島で8遺跡31点を確認した。本研究では、既存の報告書で銭種不明とされていた銭貨について、X線透過撮影を行いその銭種の特定制を行った(図版2参照)。そして、これらの出土銭貨について宮城氏の時期区分に基づき、宮城IV期～宮城VI期の地域的な比較検討を行った。

図1は、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島の宮城IV期～VI期の出土銭貨の総数における各時期の割合をグラフ化したものである。宮城IV期は、明銭を伴わない北宋銭、南宋銭、元銭などで構成される時期を示し、宮城V期は、明銭を伴いながら北宋銭、南宋銭、元銭などの銭貨が出土する時期を示し、宮城VI期は概ね近世琉球を示す時期である。

図1に示されるように、宮城IV期～宮城VI期については宮古・八重山諸島と沖縄諸島で明確な出土傾向の違いがみてとれる。宮城IV期においては、宮古・八重山諸島での出土銭貨の割合が高くなるのに対し、沖縄諸島では非常に低い割合を示す。このような出土銭貨の傾向は、中国産陶磁器の出土状況と相関関係にあると考えられる。つまり、浦口窯・閩清窯白磁が宮古・

八重山諸島で非常に多く出土しており、宮城IV期の出土銭貨はこれらの中国産陶磁器と共に宮古・八重山諸島に搬入されたものと考えられる。また、当該期の宮古・八重山諸島の穿孔銭貨(図版1)の穿孔方法に地域的な特徴があることは宮城氏が指摘するとおりである。

宮城V期になると2つの地域の出土の割合は大きく逆転し、宮古諸島の宮城V期における出土は確認できなかった。宮城V期における沖縄諸島での出土銭貨の増加は、明との朝貢交易がその背景にあることが推察される。この交易により沖縄諸島へは明との交易により多くの品物が搬入されるようになり、明銭も同じ経路で搬入されたものといえる。この明銭の貨幣としての利用について、宮城氏は地域的、社会的な構造による段階を示している。この点をふまえるならば、明銭の出土しない宮古・八重山諸島は、琉球王府において貨幣価値を必要としない社会地域であったことを示しているといえる。

宮城VI期においては、宮古・八重山諸島でもの出土銭貨の割合がやや高くなるものの、全体の状況としては、宮城V期と近い状況を示している。

本研究においては、宮城IV期～VI期における地域的な出土銭貨の割合の違いについて示すことができた。このような地域差が発生する背景には、その出土銭貨を搬入した交易集団の交易形態の変化が推察され、明代以前の宮古・八重山諸島を含めた交易経路を考える上で一つの資料を提示できたものと考えられる。

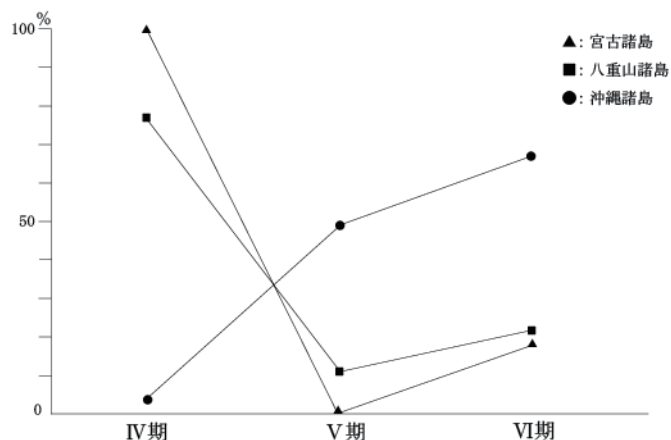
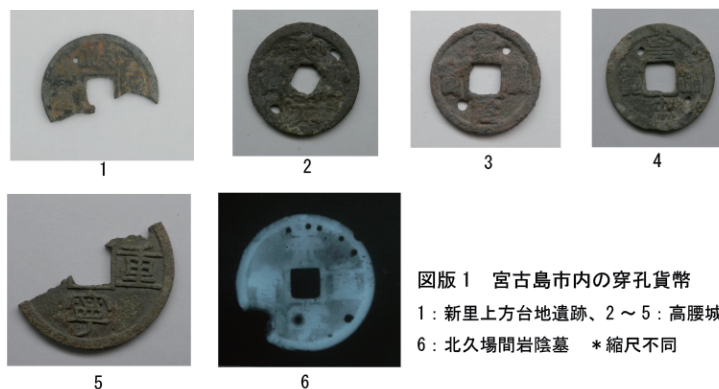
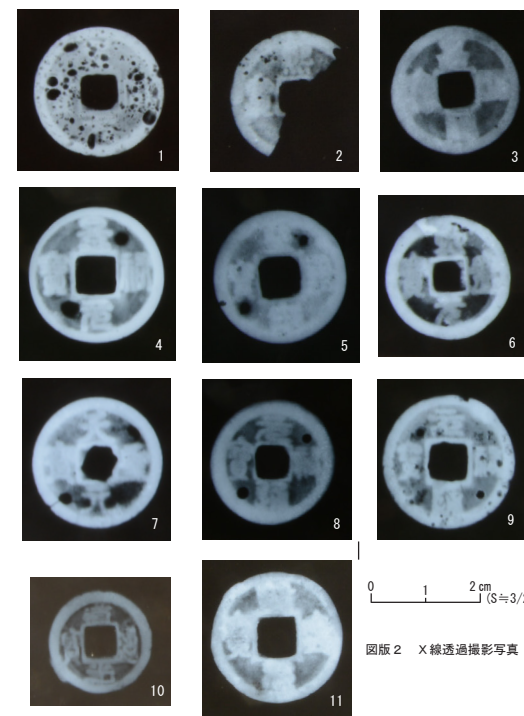


図1 宮城IV期～VI期における宮古・八重山・沖縄諸島の銭貨出土の割合



図版1 宮古島市内の穿孔貨幣
1: 新里上方台地遺跡、2～5: 高腰城跡、
6: 北久場間岩陰墓 *縮尺不同



図版2 X線透過撮影写真

6. まとめ

伝承に残る与那覇原軍は、老人、子どもに対しても容赦のない凄惨な争乱であったとされる。しかし、これまでの遺跡の発掘調査では、このような戦闘に関係する資料は鉄製の弓の鏃が1点、鎧の一部が1点出土するのみで、伝承の争乱とはかけ離れた状況にある。

その一方で、14世紀になると、高腰城跡やムイズマ遺跡などのように標高の高い丘陵の上部に石積を設けた遺跡が形成されるようになる。これらの石積の遺跡は、一見して沖縄本島のグスクと同様に、外部からの侵攻に対する防衛を目的とするように捉えられる。しかし、今回のシンポジウムでの報告にあったように、石積は内側からみると30～40cmの高さしか有せず、グスクとは異なる様相を呈する。また、石積の内部は、人為的な造成も行われていると考えられ比較的平坦な平場を有するが、丘陵の最高標高部に位置するため、風の影響などを考えるならば居住に適した環境ではないとみえる。では何のために、石積をもった遺跡が形成され始めるのか？。私見を述べるならば、これらの遺跡は、海域を意識した遠見としての役割が高かったのではないかと考える。

遺跡から出土する中国産陶磁器の種類などの研究から、13世紀から14世紀にかけて中国の福州・泉州を拠点とする海域集団の活動が活発化していたことが分かる。これらの交易の補給地の一つとして宮古に多くの遺跡が点在するようになったと考える。では、なぜこれらの遺跡が15世紀前半には活動を終えてしまうのか？。その要因についても中国を中心とした東アジア海域の活動の変化が関係していると考えられる。

14世紀の後半に明が元を滅ぼすと、明は海禁令を発令して民間の交易活動を制限すると同時に、周辺の国々へ冊封関係をもとめ朝貢を促している。この明との朝貢によって一躍海洋国家として繁栄するのが琉球王国である。与那覇原軍は、与那覇原が根間・外間を拠点とする目黒盛に敗れて終わりをむかえる。その後は、目黒盛が宮古島の主長となり、敗れた与那覇原の一員であった真佐久が中山王察度へ朝貢し、与那覇勢頭として宮古へ帰島する。見方を変えるなら、与那覇原軍の後には、宮古は目黒盛と与那覇勢頭をトップとした中央集権化が図られ、その拠点は漲水港を眼下にひかえた現在の平良庁舎一帯に集約したと捉えられる。このような宮古島島内における交易の拠点、もう少し別の見方をすると交易を行う海域集団が中国南部の集団から沖縄島の集団へ徐々にシフトしていくなかで、集落の活動が衰退していく遺跡があったのではないかと考える。

しかし、一方では、宮古島の南海岸に代表されるように元島遺跡と呼ばれる15世紀中頃以降に遺跡の活動が活発化する遺跡群も登場する。この点をふまえるならば、島内における内的な要因も存在していたことが想定される。この点については、シンポジウム内でもご意見をいただいたところであるが、残念ながらこの部分まで詳細な調査が行われておらず、今後の課題である。逆にいえば、目黒盛や与那覇勢頭が宮古を治め始めた14世紀の後半から、仲宗根豊見親の登場する15世紀後半までの約一世紀の時期については、歴史史料で触れられることも少なく、調査・研究の少ない霧がかかった時代であると感じる。しかし、15世紀後半以降、宮古が琉球王府の体制下に組み込まれていくなかで、決して欠かすことのできない時代である。まだまだ不明な部分も多い宮古のグスク時代の歴史であるが、今後とも継続して調査・研究を進めていきたい。

<シンポジウムへの感想とご質問>

- ①北海岸にあった城がほとんど15世紀前半で終焉してしまう理由が交易先の変遷だけでは理解できません。島内の集権化や経済（商業）の発達が理由ではないでしょうか？与那覇原軍とは無関係ではないでしょうか。
- ②北海岸の遺跡の消失は密貿易活動が琉明間の朝貢貿易に吸収された結果だと思いますが、その過程での与那覇原軍の活動を交易利点の観点からどのように考えていますか？
- ③宮古島の諸地域はだれか（自然も含めて）に攻撃されたのでしょうか？なぜグスクをつくる必要があったのでしょうか？
- ④石積みな何のために積まれたのか（ただ陣地を示すものなのか）沖縄本島では中城城等は高く積まれている。
- ⑤年代設定の問題もありますが、高い石積と16世紀後半の後期倭寇の活動についての関連を考えたことはありませんか？
- ⑥浦島大主の城が川満の端になるのは問題ないでしょうか？。城は集落の中心にあるのではないかと思います。
- ⑦目黒盛は外間御嶽、与那覇原は盛加川とあまりに近い土地で2分されているが、本当に戦があったのか？（戦があった事は事実であると思うが…）
- ⑧与那覇原軍とは、与那覇に逃げていったから与那覇になっているのか？
- ⑨宮古の歴史、伝承に興味がありたまたま情報をいただきましたので参加いたしました。関東では中々こういった話は聞けませんので良い体験になりました。インターネット上でも内容のまとめや今後の活動についての情報が分かるとよいのですが…。有難うございました。



シンポジウムの会場風景

【おわりに】

シンポジウムへは大変多くの方が足を運んでくださり、本テーマへの関心の高さがうかがえました。今後とも本テーマへの調査・研究を継続し、また改めての報告の場をもちたいと考えております。末尾になりますが、本助成を行っていただきましたおきなわ銀行の関係者各位、調査協力者、シンポジウム参加の皆様へ厚く御礼申し上げます。

調査関連写真



ムイズマ遺跡近景



オイオキバル遺跡頂上部より北海岸を望む



オイオキバル遺跡石積調査作業風景



西銘御嶽の石積



高腰城跡の石積



シンポジウム風景

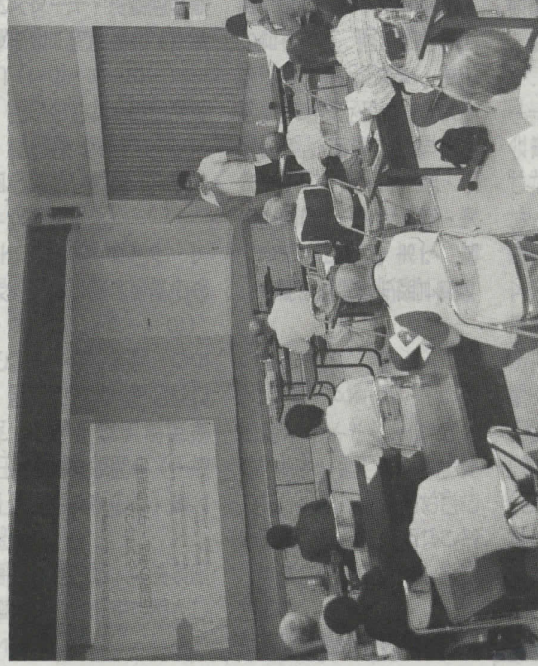
13世紀後半の交易探る

シンポ「伝説の争乱・与那覇原軍」

中国福州と宮古八重山諸島

シンポジウム「伝説の争乱・与那覇原軍」が12日、市働く女性の家いみなあ

で開かれた。研究者3人が、これまでの研究成果を発表し、先行研究者の解釈を



多くの市民が参加していたシンポジウム＝12日、市働く女性の家

表。このうち、久貝弥嗣さんは、先行研究者の解釈を

引用し「13世紀後半、中国の福州、台湾、宮古・八重山諸島、沖縄本島は交易圏にあった。宮古・八重山諸島は沖縄本島より重要な位置を占めていたと考えられる」との見解を示した。市民ら約50人は興味津々に聞き入っていた。

3人は、2017年度おきなわ銀行ふるさと振興基金の助成を受け、「伝説の争乱・与那覇原軍―宮古島の13世紀から15世紀にかけての防御的遺跡の消長に関する研究―」をテーマに調査・研究に取り組んでいる。今後1年間の研究成果を報告書に

まとめる。

今回のシンポは、伝説の争乱である与那覇原軍について、宮古島の遺跡に残された石積や、中国産陶磁器、宋銭などの考古学の視点からアプローチを行い、13世紀から14世紀の宮古島の社会情勢について考察した。

本村麻里衣さんは「宮古島の石積で囲まれた遺跡を考察する―現地調査報告―」と題し、久貝弥嗣さんは「宮古島市内タスク時代の中国産陶磁器」、久貝春陽さんは「川崎地域の遺跡にみる与那覇原軍」と題してそれぞれ発表した。

久貝弥嗣さんによると

先行研究者の吉岡康暢氏は「宮古・八重山諸島の華南通商の背景には、1276年に南宋が滅し、元のクビライが1277年に泉州・漳州などの市舶司を設置するなどの海外貿易振興策が影響を与えている」とし、宮古・八重山諸島の華南通商における元代の中国側の拠点港は福州・ときには泉州としていると提唱。

また先行研究の森本朝子氏は「13世紀後半に、福州および泉州を拠点港とした中国南部から台湾、東南アジアにかけての交易圏がみえてこれ、宮古・八重山諸島もその交易圏の一端に含ま

れていたと考え」としている。

シンポに参加した宮古郷土史研究会の下地和宏会長は、「元史(げんし)」という古史料にある「1317年に婆羅(ぼら)の(ため)が中国の永嘉(えいかけん)に漂流した」との記事に注目。「13世紀後半から宮古・八重山諸島が福州・泉州と交易していたことが明らかになってきた。漂流した記事は生きとけるかも」と推測した。

記事の「婆羅」は現在の宮古島市城辺保良と考られている。

「伝説の争乱・与那覇原軍」研究

中国産陶磁器、石積遺構など視点

宮古島市教育委員会の久貝弥嗣さん、久貝春陽さんと本村麻里衣さんが2017年度おきなわ銀行ふるさと振興基金助成を活用して共同研究している「伝説の争乱・与那覇原軍―宮古島の13世紀から15世紀にかけての防衛的遺跡の消長に関する研究―」のシンポジウムが12日、宮古島市働く女性の家で行われた。考古学の視点から与那覇原軍の要因となったヒトの活動につ

いて、石積遺構など当時のヒトが残した遺跡や焼物などのようにヒトが使用していた道具に焦点をあて、ヒトの活動とその歴史的背景について考えている。

与那覇原軍とは「与那覇原が各地の集落を攻略し、最終的には目黒盛に敗れるという一連の戦い」と説明。歴史史料で初めて記述されたのは1748年に編された「宮古島記事仕次」に「高腰の按司与那覇はら軍に不ろふされし事」とあると紹介し、慶世村恒任著の「宮古史傳」、稲村賢敷著の「宮古島庶民史」を史料などで共同研究を進めているという。

研究する意義については、宮古島の歴史を考える上で、与那覇原軍は大きな事で、その前後では歴史状況が一変すると強調。同軍前は各地域に主や按司など有力者が

が治める小規模な集落単位が多数見られ、少なからず争いの伝承が残っているが、同軍後は各地の有力者が一掃され、目黒盛によって沖縄本島の中山の支配下に入った中央集権化構造が作り出されたという。

研究は中国産陶磁器や石積遺構などでアプローチ。久貝弥嗣さんは「宮古島市内グスク時代の中国産陶磁器」、久貝春陽さんは「川崎地域の遺跡にみる与那覇原軍」、本村さんは「宮古島におけるグスク時代の石積みで囲まれた遺跡を考える―現地調査報告と課題―」のそれぞれのテーマで研究しており、この日のシンポジウムでは現在の成果について発表した。

発表のあと総合討論が行われた。会場には多くの人が詰めかけ熱心に耳を傾けていた。



「伝説の争乱・与那覇原軍」の共同研究発表に耳を傾ける参加者＝市働く女性の家

投稿

る14世紀の宮古について考えてみたい。

去る5月12日、与那覇原軍について考古学の視点からアプローチを行ったシンポジウムを動く女性の家ゆいみなあで開催した。シンポジウムは50名以上の方が参加し、多くの質問、ご意見をいただき、ご意見をいただきました。ただ、与那覇原軍に対する関心の高さが伺えた。しかし、時間の制約上回答することのできた質問も多かった。そこで、今回はこれらの質問への回答も含め、今一度与那覇原軍のおこったとされる

外部からの侵攻に対する防衛を目的とするように捉えられる。しかし、今回のシンポジウムでの報告にあったように、石積の内部からみると30〜40センチの高さしか有せず、グスタとは異なる様相を呈

与那覇原軍について考古学の視点から考える

— 宮古島島内における遺跡の変遷 —

久貝弥嗣(宮古郷土史研究会)

する。また、石積の内部は、人為的な造成も行われていると考えられ比較的に平坦な立場を有するが、丘陵の最高標高部に位置するため、風の影響などを考えるならば居住に適した環境ではないとみえ

る。では何のために石積を築いたのか。私見を述べると、これは15世紀前半に活動を終えてしまっている。その要因について、中国を中心とした東アジア海域の活動の盛衰が関係していると考え

る。14世紀の後半に明が元を滅ぼすと、明は海禁令を発令して民間の交易活動を制限すると同時に、周辺の国々へ冊封関係をもちめ朝貢を促している。この明との朝貢によって一躍海洋国家として繁栄

するものが琉球王国である。与那覇原軍は、与那覇原が根拠・外間を拠点とする目黒盛に敗れて終わりをむかえる。その後、目黒盛が宮古島の主長となり、敗れた与那覇原の一員であった眞佐久が中山王察度へ朝貢し、与那覇勢頭として宮古へ帰島する。見方をかえるならば、与那覇原軍の後には、宮古は目黒盛と与那覇勢頭

をトップとした中央集権化が図られ、その拠点は瀬水港を眼下にひかえた現在の平良行舎一帯に集約したと捉えられる。このような宮古島内における交易の拠点、もう少し別の見方をすると、交易

易を行う海城集団が中国南部の集団から沖繩島の集団へ徐々にシフトしていきなかに、集落の活動が衰退していく遺跡があったのではないかと考える。しかし、一方では、宮古島の南海岸に代表されるように元島遺跡と仮定される15世紀中頃に遺跡の活動が活発化する遺跡群も登場する。この点をふまえるならば、島内における内的な要因も存在していたことが想定される。この点については、シンポジウム内でもご意見をいただいたところでありますが、残念ながらこの部分まで詳細な調査が行われておらず、今後の課題である。逆にいえば、目黒盛や与那覇勢頭が宮古を治め始めた14世紀の後半から、仲宗根豊良親の登場する15世紀後半までの約一世紀の時期については、歴史史料で触れられることも少なく、調査・研究の少ない霧がかかった時代であると感ずる。しかし、15世紀後半以降、宮古が琉球王府の体制下に組み込まれていくなかでは、決して欠かすことのできない時代である。まだまだ不明な部分も多い宮古のメソリシック時代の歴史であるが、今後とも継続して調査・研究を進めていきたい。